平成 31 年度

「全国学力・学力状況調査」からの結果と考察

◆本調査について

- 全国の６年生対象
- 教科は国語、算数の２教科
- 国語と算数には、知識を問う問題と活用を問う問題が混在している。

◆結果

〇国語

	平均正答率（%）		
評価の観点	本校	東京都	全国
関心・意欲・態度	50.5	57.2	57.6
話す・聞く能力	64.7	73.1	72.3
書く能力	52.5	55.4	54.5
読む能力	74.0	83.0	81.7
言語の知識・理解・技能	47.6	55.7	53.5

- 評価の観点の平均正答率では、どの観点でも都や全国を下回っている。個々の問題を見ると「書く能力」について平均正答率を上回っているものもあるが、「話す・聞く能力」「読む能力」については平均正答率が低いだけでなく無解答率が高い。
- 平均正答数で見ると上位は都や全国と同じような分布をし、都や全国のそれ（9.1 問、8.9 問）をほぼ上回る平均正答数 9 問以上の児童数は全体の 51%以上いるが、中位層から下位層の割合が多くなっている。特に正答数 0 問の児童が全体の 7%を占めていた。

〇算数

	平均正答率（%）		
評価の観点	本校	東京都	全国
数学的な考え方	58.5	65.5	62.2
数量や図形の技能	72.1	77.2	73.6
数量や図形の知識・理解	74.3	72.7	70.1

- 評価の観点の平均正答率では、「数学的な考え方」や「数量や図形についての技能」については都や全国を下回ったが、「数量や図形についての知識・理解」についてはそれを上回った。個々の問題を見ても、整数や小数の四則計算は概ね正確に処理することができていた。説明する課題に対して無解答率の割合が高い。
- 平均正答数で見ると都や全国のそれ（9.8 問と 9.3 問）を上回る平均正答数 10 問以上の児童数が全体の 55.9%以上いるものの、その一方で 5 問以下の児童数が全体の 18%おり、それが平均を押し下げる要因となっている。

◆考察

〇国語

- すべての観点において国語の基礎・基本を身に付けていく必要がある。今後とも日々の音読練習の継続や言語の知識・技能の定着を図っていく。「話す・聞く能力」「読む能力」については国語のみならず様々な教科でも指導を広げていく。
- 区の特色である「読書科」を切り口として国語に興味・関心を持たせ、その資質・能力を伸ばしていく。また、外国からの転入などで外国から転入した日本語がわからない児童に対しては区と連携して指導体制を整えていくことが急務である。

〇算数

- 整数や小数の四則計算に代表されるような「数と計算」の基礎・基本は継続的に指導を行っていく。
- 上位層と下位層の二極分化が進んでいる。下位層に基礎・基本の定着、上位層をさらに伸ばすために、実態に応じた課題提示や自力解決・練り上げの工夫などを推進していく。
- また、大人数の学年であるので少人数学習を効果的に活用していく。